

長岡ビジネスアーカイブ

第 1 号

編集・発行／長岡市立中央図書館

<http://www.lib.city.nagaoka.niigata.jp/>

このチラシは、中央図書館が開催する起業支援セミナー「独立・開業でチャンスをつかめ！ービジネスのヒントは図書館にありー」のPRのため作成したものです。

古くは縄文時代から、信濃川を活用し、交通・物流の要衝として発展してきた長岡。だからこそ、長岡地方の起業に当たってのキーワードの一つは「温故知新」。まずは長岡商人の姿を紹介します。

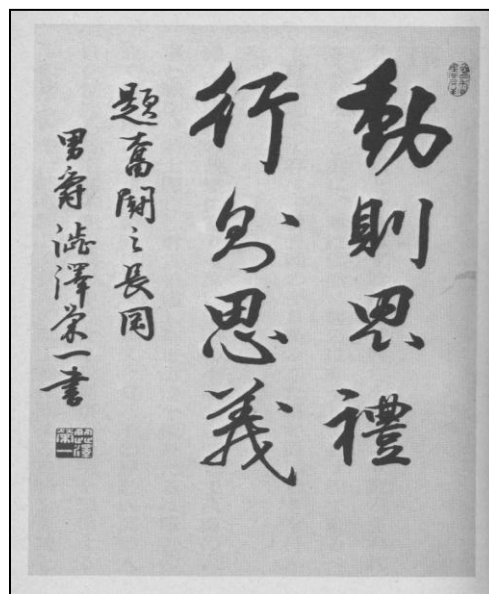
長岡商人ここにあり

『奮闘の長岡』を読む

北越戊辰戦争により焼け野原となった長岡が、なぜ再び繁栄を遂げることができたのでしょうか？ 長岡の今日があるのは決して偶然ではなく、長岡商人たちが自らの汗と才覚で立ち上がり、努力し、進取堅忍、剛健質朴、向上奮闘の特性を遺憾なく発揮したからです。

『奮闘の長岡』は、そんな長岡商人のがんばりを後世に伝えるべく、大正 3 年(1914)11 月に北越新報社から刊行されました。もともとは、「北越新報」(明治 40 年(1907)創刊、長岡市が本社、新潟日報の前身)で「長岡商業史料」と題して連載していた記事を集約した本です。当時、各界で活躍していた長岡商人など 44 人の著名人の談話で構成されています。

取り上げられている業種は、染織業・薬種商・唐物店・通船業・石油業・燐寸業・小間物商・運送業・陶器商・酒造業・金物業・鮮魚問屋・菓子商・青物商・紙商・茶店・煙草商・株式界・質屋など多種多様なものです。それぞれの業種の代表者は、その業種の歴史、自分がなぜその商売を始めたのか、継いだのか、商売替えをしたのか、失敗したこと・成功したこと、どういう経験をしたのか、事業の経緯・これからの展望、新潟県内や全国の状況、長岡の同業者のこと、自分の生い立ちや家の代々の成り立ちについて詳しく語っています。その他に、長岡藩時代の習わしや、戊辰戦争の前後、明治維新のことなども話しており、長岡の商工業発達史とし



▲本書刊行の際、洪澤栄一から寄せられた言葉。題字も洪澤です。洪澤は、長岡第六十九国立銀行(現北越銀行)の設立に協力したといわれており、長岡と関係の深い人物です(本書口絵より掲載)。

てだけではなく長岡の歴史を知る貴重な史料となっています。

本書には、事業を起こしたり、展開したりするための先人たちの知恵がたくさん詰まっています。きっと、独立・開業を目指すあなたの助けとなるでしょう。

現在、連載当時の新聞を見ることはかありませんが、中央図書館では、大正 3 年版(閲覧のみ)と、昭和 59 年(1984)に新潟日報事業社から復刻された本を所蔵しています。一度お読みいただければと思います。

(文書資料室長 石井順子)

2冊の『北越商工便覧』 に見る長岡商人の街

明治から大正にかけて、長岡町の商人はどのような店舗で商売をしていたのでしょうか。なかなか想像するのは難しいかも知れませんが、記録された絵図から、私たちは当時の商店の姿を知ることができます。

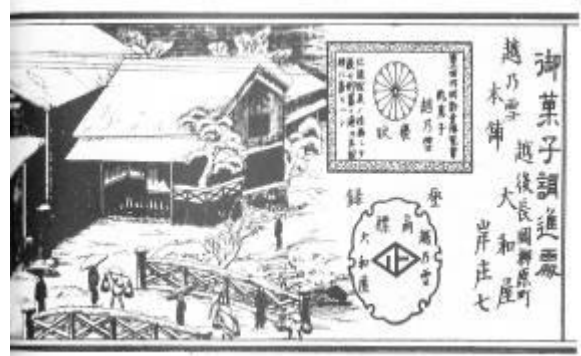
手元に当館所蔵の絵図からなる2冊の『北越商工便覧』があります。一つ目は『絵で見る明治商工便覧』(復刻版昭和62年刊、ゆまに書房、全10巻のうち第4巻)。ここに所収されている明治22年発行の『北越商工便覧』は新潟地域100軒余、上越地域130軒余、長岡地域は63軒です。作者は大阪の画家川崎源太郎で、全国の商工便覧を手がけました(長岡地域を収録した『北越商工便覧』は柏崎市立図書館所蔵)。

二つ目は『絵画 北越商工便覧』(大正8年刊)。作者は長岡の画家坪井政太郎、新潟市20軒に対して長岡町は145軒も紹介されています。2冊とも、筆のタッチは異なるもののさまざまな業種の店舗を詳細に描きだしています。

では明治版と大正版の新旧2冊の内容をみてみましょう。明治版は店舗を正面からとらえたものと、俯瞰して周囲の光景まで書き込んだものがあります。大きなれんで主張する店が目立ちますが、店内での接客の様子から店外で積み荷を下ろす作業まで、細かな描写です。

全体的な特徴として、川船交通の影響で内川(柿川)沿いの町の商店が多くみられます。たとえば渡里町の「旅人宿 ふじや」、柳原町の「太物・古着商 山口屋」、「御菓子調進処 大和屋」(写真1)、荒屋敷(表町1)の「萬絹染・呉服商 加藤榮蔵」、ほかに醤油醸造所、清酒醸造所、石油製造所などです。

大正版はまずその業種の多さに驚かされます。全国的に大正デモクラシーのうねりがおこり、ここ長岡までもその波は伝わってきました。明治31年に北越鉄道が開通すると、信濃川通船は急速に衰退し、物資や人の流れは陸路へと移り、長岡町の形成も停車場(駅)中心に形づくられて行くのです。大正6年の長岡開府三百年祭などの影響もあり、商店や町並みの整備も進んだものと思われまふ。また、商店のほかに鉄



▲写真1 明治版の『北越商工便覧』に描かれた大和屋(部分)



▲写真2 大正版の『絵画 北越商工便覧』に描かれた小林甚七商店

工所や機械製造所も多くみえることから、商工業都市として移行してゆく様子もみえてきます。

次に商店の様子を具体的にみてみましょう。平潟神社の境内には茶屋の「名物平潟だんご中村長五郎」があり、満開の藤棚の下でくつろぐ母子。柳原町の「萬車製造並附属品販売 小林甚七商店」の看板には、英字で「DUNLOP」とあります(写真2)。表町の「エビスビール販売 藤井卯吉」商店は、雁木の上に巨大なビール型の看板を掲げるなどなかなか洒落ています。

2冊のどちらからも、その時代になかった商売を取り入れようとする長岡商人の気概が感じられ、長岡人の活気あふれる暮らしが、この街で確かに営まれていたことに、改めて気づかされるのです。

それぞれ建物の景観だけではなく、店をとりまく商人・職人、庶民の様子などを描くことにより、当時の長岡の経済状況までも考察できます。ざっと100年前の時代の先端を行く絵物語をどう読み解き、生かすかどうかは、あなたのセンスにかかっています。

(中央図書館 小熊よしみ)

下駄屋の大福帳

～吉川屋商店文書より～

「大福帳」というものをご存知でしょうか。時代劇に登場する大店の帳場で、机の脇などに掛けてある分厚い帳面。番頭が机に向かい、そろばんをはじきながら、そこに何やら書き付けている。そんな場面を見たことはありませんか。大福帳とは、商店が売買の記録を付した帳面です。表紙には、福運の到来を願って「大福帳」と記すのが一般的でした。

下の写真は、表町で桐材履物（下駄）卸・小売店を営んでいた吉川屋商店の大福帳です。大正6年（1917）から同13年までの帳面で（同9年は欠）、写真ではわかりにくいのですが、どれも10cmほどの厚さがあります。町内ごとに付箋で区切られ、顧客名と売買の記録が取引の順に記されています。表紙の力強い墨書には、福運到来と商売繁盛を願う店主の意気が表れているかのようです。

この大福帳を含む「吉川屋商店文書」は、平成16年（2005）の中越大震災で被災した同家を取り壊す際に、文書資料室に寄贈されました。長岡戦災資料館の「戦災前の表町国民学校校区住宅図」で確認すると、吉川屋商店は表町5丁目（現在は表町4丁目）の通りのほぼ中央に位置しています。大福帳に記載されている顧客の中には、近隣に住む人たちはもちろんですが、「鳥十・目黒書店」「川佐・川上佐太郎」「渋谷善作」「松田周平」等の名前も見えます。上得意だったのででしょうか、その取引は数頁にわたって記されています。



▲吉川屋商店の大福帳

表紙に「大福帳」の文字こそありませんが、昭和戦前期（昭和15年（1940）～同17年頃）の帳面も残っています。こちらは写真の半分のサイズですが、厚さは10cm以上



あります。その中から、「高等女学校（現在の県立長岡大手高等学校）購買部」の記録を紹介しましょう（断簡、部分）。

八月三十一日	七十銭	
女桐ロイド小足駄絹天		一足
九月七日	五十五銭	
女二重張下駄絹天		一足
九月三十日	四十銭	
スポンジ草り		一足

「ロイド」とはセルロイド製の爪皮（雨や泥をよけるため下駄の爪先を覆うもの）。「足駄」とは、通常の下駄よりやや高い歯が付いており、雨の日などに履いたもの。「絹天」とは絹のようなつやのある綿ビロードで鼻緒に用いた布地。「二重張」とは、表面に畳が敷いてある女性仕様の下駄。

今日では、私たちが下駄や草履を日常的に履くことはなくなりました。文房具もコンビニエンス・ストア等で容易に手に入るようになった昨今、購買のある学校も減少しているのではないのでしょうか。当時は、実家を離れて寄宿舎に入る生徒も多く、そんな彼女等にとって購買はなくてはならないものだったのです。絹天の赤い鼻緒のついた下駄が並ぶ購買の店先で、商品を選ぶ女学生たちの姿が目浮かぶようです。

文書資料室は「吉川屋商店文書」の他にも「片山家文書」（本町・片山商店）、「南清四郎商店文書」など、いくつかの商家の資料を所蔵しています。これらの資料は、単にその商家の歴史を物語っているだけではありません。大福帳や顧客帳、請求書・領収書、店のチラシ等々、すべての資料から、移り変わる時代と、その流れの中に生きた長岡商人の姿を読み取ることができるでしょう。時代を超えて語りかけてくる長岡商人の心意気は、あなたの起業・経営の一助となるに違いありません。

（文書資料室 桜井奈穂子）

ビジネスのヒントは図書館にあり

参加無料



独立・開業でチャンスをつかめ！

回	日 時	会 場	内 容
1	11月14日(木) 午後6時30分～ 8時45分	中央図書館2階 講堂	<p>第1部 先輩起業家体験談 「小麦に惚れ込んだこだわり店主、起業への道」 講師：山口早苗さん(ピザ&パスタ小麦畑店主)</p> <p>第2部 ①長岡商工会議所利用術 ②図書館活用ミニ講座～ビジネス情報を図書館で～</p>
2	11月21日(木) 午後6時30分～ 8時45分	栃尾文化センター 大会議室	<p>第1部 先輩起業家体験談 「みんなの心をつかめー起業成功の秘訣ー」 講師：猪俣雄大さん(たつまき堂店主)</p> <p>第2部 歴史に学ぶ 「外山脩造と小林友太郎の経営哲学」 講師：松本和明さん(長岡大学教授)</p>
3	12月1日(日) 午後2時～ 3時30分	中央図書館2階 講堂	<p>起業のすすめ ーアイデア発想から計画づくりまで 講師：小松俊樹さん(中小企業診断士・長岡大学特任教授)</p>

- ・第2回は中央図書館から栃尾文化センターまでの送迎バスあり。ご希望の方は中央図書館にお申込ください。
 - ・セミナー参加者対象に中小企業診断士・税理士による予約制の相談会あり(12月1日・8日・14日)。詳しくはセミナーの際にご案内します。
- 【申込方法】**参加ご希望の方は、各回前日までに中央図書館へ電話・FAXまたはメールでお申し込みください(メール・FAXの方は氏名・電話番号を明記の上、お送りください)。

【編集後記】先の見込みもないまま、大胆にも第1号と銘打って(周囲を説き伏せて?)発行してしまいました。そうは言っても商都長岡。ネタは転がっているはず。夏の風物詩の「雪にお」の氷の話や中心市街地の商店街誕生秘話、はたまた、江戸時代の大福帳に使われた符号(暗号)のことなど、さらにパワーアップを乞うご期待。(K.K)

平成25年10月25日発行

編集・発行：長岡市立中央図書館

〒940-0041 新潟県長岡市学校町1-2-2

TEL 0258-32-0658 FAX 0258-32-0664

E-mail: lib@city.nagaoka.niigata.jp

ビジネス支援の情報は下記からどうぞ

<http://www.lib.city.nagaoka.niigata.jp>